

# 新九郎通信



発行 小田原市栄町2-13-3 (株)伊勢治書店3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

早いもので師走である。今年も多くの方々にギャラリーをご利用頂き、素敵な作品や人との出会いを頂いた1年であった。新九郎通信では、「生活にアート」を心情に、アートシーンの紹介を心がけてきた。「街なみスケッチシリーズ」は、添えられたエピソードとともに毎月楽しみな連載だった。新「東海道シリーズ」や「思うことなど」を楽しみにされている方も多い。アトリエ訪問には7人の魅力ある方々が登場された。アトリエを訪ね作品とひととなりを紹介することで、鑑賞者のアートシーンを広げるお手伝いができたらうれい限りである。今年最後の企画展「新九郎アートフェスティバル」では、新たに出品してくださった作家を交え、絵を愛する皆様とレセプションでお話しできることを楽しみにしている。

## 新九郎12月の展覧会のご案内

## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 12/4(水)~9(月) 遊楽会展 刻字・篆刻の作品展	横浜書展小田原市民書道展にも出品しています。今年は大磯城山公園茶室でも展示しました。
 12/11(水)~16(月) アトリエコネコ 作品展	大人クラス作品展 油彩・水彩14名が出品 指導：藤本因子
 12/18(水)~23(月) 新九郎アートフェスティバル 2013	年末最後を飾る恒例のアートフェスティバル 裏面に作家紹介
 12/20(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ

会期・展覧会名	会場
12/5(木)~8(日) 第36回秀月会書道展	飛鳥画廊 0465-24-2411
12/11(水)~16(月) 三世代展油絵・写真・日本画	飛鳥画廊 0465-24-2411
12/11(水)~16(月) 手作り展 坂口享子	アオキ画廊1F 0465-22-0825
12/19(木)~23(月) 第6回輝き・ステンドグラス展	アオキ画廊1F 0465-22-0825
11/28(木)~12/17(火) 2013 歳末常設展	ツノダ画廊 0465-22-4250
10/12(土)~26.3/30(日) 海外を魅了した輸出工芸と職人技の美	小田原城ミュージーゼ 0465-22-3823 12/31, 1/1 休館
10/25(金)~12/8(日) ガラスの煌きルネ・ラリック 金唐紙と織りなす花鳥風月の浪漫	松永記念館 0465-22-3635

### おだわらミュージアムプロジェクト (OMP)

#### 地方公立美術館・市民ギャラリー見学ツアー 2nd “これからの美術館のカタチ”

#### 参加者募集

当プロジェクト (OMP) では、市民の皆さんにアートの素晴らしさを体験してもらうため、昨年小田原市と協働で、美術展「長谷川溝二郎展」を開催しましたが、他にもアートに関する様々な活動を行っています。今回は第2回として、川口市立アートギャラリー・アトリアとさいたま市立うらわ美術館を訪問します。スタッフの方から開館のいきさつや、運営の現状などをお聞きし館内を見学します。これからの時代に相応しい、美術の拠り所となる“場”の構築について共に考えていきたいと思います。

- 実施日 2013年12月8日(日) 雨天決行
- 行程 集合場所：小田原駅 JR改札前(ちょうちん下)  
集合時刻：午前8時  
参加費：無料(交通費・飲食費・入館料=自費)
- 主催：おだわらミュージアムプロジェクト
- 後援：小田原市文化政策課
- 問合せ/お申込み TEL:090-9324-4084 木下(OMP)

### 東海道五十三次 ④ 平塚宿(高麗山)

#### 5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



相模川に架かる馬入橋を渡ると平塚市にはいる。橋を渡って一旦国道1号線と離れ、平塚駅前を通る旧東海道を進む。平塚は、相模川を利用した物資の集散地や、東海道はもちろん、中原往還(中原街道)、八王子道が通る

ため交通の要所として栄えた。その賑わいは相当なもので、平塚宿の本陣は贅沢な約110坪の総ケヤキづくりであったと伝えられている。

しばらく歩き花水川に近づくと、目の前にお椀を伏せたような高麗山が見えてくる。この景色は、広重の版画によく似ている。そこで、広重が描いたであろう場所を探して、スケッチすることにしたが、位置的に富士山は見えなかった。

### 思うことなど 横井山 泰



アトリエ展は非常に面白い展示になった。入口には絵本原画。壁伝いに進んだ先の小窓から暗室に灯したキャンドルの林を望む。その隣にはランダムに打ち付けた板にニクイ銀細工。コーナーには天井までの足のドロイーイングのリアルなスネ毛に大磯妻がドッサリと生っている。肌色妻と隣り合ったピンクとブルーの色彩の平面は気持ちのいい対比で、ローカルな夜景へと続く。高座より高い目線で大きな猫と鹿が睨み合っている隣ではミカンの釉薬が海辺の窓の様な色をしていた。「3日間限定ではもったいない」という声は正解だと思う。ワークショップも盛況。最終日の落語会はまさかの満員で、まさに非常な日常でした。ありがとうございました！協賛、収益、広報、諸々課題はありますが繋げていきたい企画です。日常に戻ってからはコンペの搬入をして。原画で好評だったものを個展用に大作に起こし、完成していた作品も手直した(最近、作品の完成の規定の距離が伸びている)。ようやく画廊に納品が済んだところでソファで転寝をした。腰が痛くて目覚めると立てない、腰抜けとはよく言ったものだ。ガクガクで帰宅後は食欲も無く寝込んでしまった。10kg近く痩せていた。腰はそろそろ良くなったが家人がやさしいので仮病もよからう。



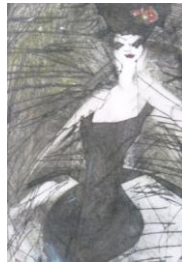
**【植松知祐】**  
 荒れ狂う嵐をくぐり抜け  
 たどり着いたところはどこなのか  
 見えない世界に目をこらし  
 いろはにほへどちりぬるを  
 聞かせてほしいぜ  
 Sound of Silence



**【柿沼朋実】**  
 2013年は7月に第2子を出産し子育ての1年となりました。2014年はこの経験を活かした作品作りを目指したいと思っております。1年を締めくくる展示として、来年の干支、笑う馬を展示します。見てニンマリ一緒に笑っていただいで来年2014年を迎えていただきたいです。



**【橋本様々】**  
 奈良奥吉野から上京して里見勝蔵に師事。根府川海岸に庵を結び、シャカムニブツ、花や風景を油彩、コラージュ等で描いた。三笠会館の谷善之丞や作家の中河与一、東泉院岸老師と親交を深め『大法輪』にカットを長く連載している。



**【佐竹正明】**  
 今年、松田正平展がありました。三十年前、先生の自宅にお邪魔して、二日酔いのなかスケッチをする事となった時、先生が「好きなように描きんさいよ」と一言。深く重い言葉だったと、先生の絵を観ながら改めて思った。



**【高橋雅和】**  
 わたしの作品は おもに水溶性の用材で描かれて居りますが 作品の主題としてはなにが描かれているというのではなくなにがそれぞれの支持体に浮かび上がってきたのか浮かび上がってくるのかを待ち しみいるような自身の直感にゆだね 画面の定着として 筆をおきます その際 心象の風の状態に 鑑み(かんがみ) 素直なあらわれで あることを願いつつ制作しています



**【吉本伊織】**  
 私は次のような小田原が好きです。駅の立呑屋で体を暖め、城を少しだけ見て、夜の海岸に出ます。背中大きな道路を行き交うトラックが、夜にリズムを存在させます。そういう体験や印象や記憶を絵にしています！



**【二宮宗子】**  
 季節や記念日にあわせて、部屋に飾って楽しんでいただける作品を目指して制作しています。



**【鈴木隆】**  
 今年も青瓷、みかん灰釉の器を中心に出品予定です。



**【横井山泰】**  
 友人との共著で、いぬのはなしという絵本を作っています。この絵は文化堂印刷での最初の打合せで絵本の方向性を示すために描いた絵です。



**【木下泰徳】**  
 陽のあたる風景が好きです。コンスタブルの「干し草車」(1821)。小川に浸かった干し草車のがしりした形と、水に反映する光の描写に惹かれます。目がくらむようです。少しでも近づければ…

12月21日(土) 17:00-レセプション 作家やアートファンとの語りをお楽しみください。  
 アートの好きな方、お気軽にご参加ください(参加無料) オードブル用意。差し入れ歓迎。

十一月の17

◆ASHIGARAアートフェスティバル2013、横井山泰氏企画による「非常な日常」展があった。一番の見所は横井山氏のスタジオである。30坪ほどのスペースで、天井が5mちかくあり美術館なみである。横井山氏は前回のASHIGARAアートフェスティバルVol.10.1で元工場をソウセイカフェというアートのスペースに作り替えたとき、メンバーの中で中心的な働きをした。このスタジオも壁一面のペンキ塗りから、新たに移動展示壁を用意するなど一人で行った。

今回はスタジオそのものが作品ともいえ、場の楽しさと力を感じた。展示では moさんのローソクのインスタレーションが評判であった。壁の一角に窓枠のような覗けるところがあり、隣の暗い部屋に灯した色とりどりの大小のローソクが揺らめいてきれいだった。また Nicocoleの大磯妻(人形)を展示するための背景画として、5mの高さに達するかという、壁一面に描いた和田真帆さんの巨大な脚のドロイングが目を引いた。

◆アーティスト・レジデンス・イン小田原は海外作家5人日本人作家5人が尊徳記念館で滞在制作をした。制作現場を公開し作家との交流ができる。私は制作現場を見る事が出来なかったが、清閑亭での展覧会を拝見した。海外の作家は造形の思考方法が明確で新鮮であった。聞けば画材等は持参せず、こちらで用意されたもので、ぶっつけ本番の制作スタイルのようだ。小田原にきてから日本の包装紙や、お弁当箱などを感じさせるものを集め作品に生かし、日本の印象を鮮やかに表現していた。中々 Lidia Satou というクロアチアの女性作家の作品に惹かれた。赤を主体に大胆なドロイングと松とかをコラージュで配した平面作品で、日本的な空間の表現であった。アートを見ることとは、作品を通じてその底にある作家の造形思考を感じることに思える。小田原でこのような展覧会、特に海外作家の作品を観る機会はないので、意義のある企画であると思う。

◆アール・ド・ヴィーヴル NPO 法人設立の記念シンポジウムがあった。萩原代表幹事の挨拶の後、アートディレクターの中津川浩章氏による、アールブリュット(生“き”の芸術、美術の専門教育を受けず自由な表現の作家) 作品の解説と、活動の紹介があった。氏はデザイン学校の講師や、作家活動と共に障害者の美術活動の支援に十数年携わってきている。絵の描き方や色の塗り方等特に指導はしないというが、講演を聞き良い指導者がいてこれらの作品が生まれてくるという事が理解できた。まず絵を描く場所を用意すること、描画材や紙等の支持体の種類を豊富に揃えること等の環境作り。そして制作を温かく見守ること。大事なことはほめることという、それも本気で。これらの作品の美しさ、素晴らしさを理解しているからこそできることなのだろう。今年5月、新九郎でアール・ド・ヴィーヴルの展覧会をしていただいた。700名を超える入場者があり盛況であった。アールブリュット絵画の魅力・素晴らしさをもっと多くの方々へ伝えたい。ギャラリーが作品発表の場としてその一助になれば幸いである。Ⓞ